

# 法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-11-22

## 大学教育における文系環境学の展開とテキスト ト[『フィールドから考える地域環境 持続可能な地域社会をめざして(人間環境叢書1)』 小島聡・西城戸誠編著]

KOJIMA, Satoshi / 小島, 聡

---

(出版者 / Publisher)

法政大学人間環境学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

人間環境論集 / 人間環境論集

(巻 / Volume)

14

(号 / Number)

1

(開始ページ / Start Page)

35

(終了ページ / End Page)

39

(発行年 / Year)

2013-06

# 大学教育における文系環境学の 展開とテキスト

小島 聡

『フィールドから考える地域環境 持続可能な地域社会をめざして(人間環境叢書1)』  
(小島聡・西城戸誠 編著/ミネルヴァ書房) 2012年

20世紀が終焉をむかえようとしていた1990年代、「21世紀は環境の時代」という言葉が、流行を先取りするかのようには日本社会に広まっていった。実際、ISO大国といわれたように、ISO14001の認証を取得する企業が急速に増え、国や自治体も環境基本法や環境基本条例など法的根拠をつくりながら環境政策を拡大させていく。さらに市民社会でも、特定非営利活動促進法(NPO法)が1998年に制定されて以降、他の活動分野と同様に環境NPOが増加していく。そしてこうした流行は、非営利組織の一つである大学にも及び、学部・学科の新設に関する事前規制の緩和と相まって、90年代から2000年代にかけて環境系の学部・学科をつくる動きがみられるようになる。

本書を「人間環境叢書1」として刊行した法政大学人間環境学部も1999年という世紀末に開設された。1999年は、1989年の東西冷戦終結、国連総会における地球サミット(1992年)の開催決定という年から10年目であり、内輪の目線ではあるが、大学教育からみた現代環境史の一コマということもできる。

世紀転換期に登場した環境系の学部・学科の多くは文系(文理融合を含む)という傾向が顕著であった。法政大学人間環境学部も開設以来、日本初の文系の環境総合(政策)学部であることを標榜してきた。こうした傾向は、文系学生を対象としたカリキュラム構造を用意するのは当然として、文系環境学のア

アイデンティティを模索する必要性を浮上させた。

文系の環境学づくりは、新たな知的領域の生成プロセスと、学生に対する試行錯誤の教育実践が並行するという混沌とした状況の中で進めるしかなかった。大学教育として、文系の環境学を総体としてどう伝えるのかということは、学生のアイデンティティ・クライシスを防ぐためにも避けては通れない課題ではあるが、他方で、新たな知的領域はまだマニフェスト段階にあり、共通テキストをつくることは常道ではあるものの、簡単ではなかった。

誤解を恐れずに言えば、そもそも、環境学が理系だけのものであった時代は、大学1～2年の基礎教養は別として、「環境学」という括り方の専門教育のプログラムやテキストはさほど必要ではなかったのかもしれない。自然科学の個別領域の専門性を高める方向性でよかったからである。それに対して、文系の環境学部や環境学科が登場したことで、個別の文系学問分野の応用編を研究と教育の両面から体系化してテキストとしてまとめていく作業（環境社会学、環境経済学、環境法学・・・）とともに、それらの集合である文系環境学のイメージを提示するテキストが必要になってきたといえる。

印象論ではあるが、文系の環境学部や環境学科が登場する世紀転換期から、文系の個別学問分野による環境学のテキストが叢生してくるが、同時に、文系環境学を包括的にとりあげた第1世代のテキストも登場してくる。後者については、基礎知識の提供に加えて、新たな知的領域、新たな大学教育の生成期を反映した文系環境学の構想や枠組み、着眼点や方法論を提示したタイプが目につく（武内和彦・住明正・植田和弘著『環境学序説』岩波書店、2002年／石弘之編『環境学の技法』東京大学出版会、2002年）。

また、第1世代のテキストでは、物理的環境だけではなく、環境と向き合う人間の存在が明確に意識された。この「人間主体的環境論」（武内ほか、前掲書）は社会的存在としての人間と環境の相互作用に着目しており、したがって、人文科学、社会科学に属する文系学問領域からのアプローチが重要になるのは言うまでもない。法政大学人間環境学部だけではなく、「人間環境」という名称を使った学部学科が相次いで登場したのも、受験生のイメージを考慮したネーミングの事情だけではなく、この時期、文系環境学の生成プロセスにおける「知の再創造」への視座が広く共有されていたからともいえる。

そして文系の環境学部や環境学科の新設ブームから約10年が経過し、研究面、教育面での一定の蓄積を背景として、個別学問分野のテキストの増加とと

もに、包括的な文系環境学のテキストも第2世代が登場してくる。オーソドックスなタイプは、文系環境学を構成する個別学問分野のエッセンスや思考方法、それらが扱っている現実のテーマやケースを、全体のバランスに留意しながら配置したテキストであろう（竹村恒夫ほか編『社会環境学の世界』日本評論社、2010年／環境政策研究会編『地域環境政策』ミネルヴァ書房、2012年）。

他方で、オーソドックスなタイプのテキストに対して、文系環境学の教育・研究の10年程度の経験をまとめて、大学教育の次のステップに活用することを目的としたタイプのテキストも可能なはずである。

以下に紹介する『フィールドから考える地域環境 持続可能な地域社会をめざして（人間環境叢書1）』も、そのことを意識したテキストである。

本書は、文系環境学の多様な領域のうち、地域環境に限定してはいるものの、包括的なテキストを志向しており、書名にあるように、「フィールドから考える」というコンセプトで2部構成にしているのが特徴である。

第1部では、様々な学問分野（行政学、社会学、労使関係論、文化表象論、西洋史学、日本史学、生態人類学）が、地域環境や地域の持続可能性についてどのようにとらえているのかという、フィールド探訪の特性を、具体的なテーマに即して論じている。本書は、文系環境学を構成する代表的な学問分野としては経済学、経営学、法律学などが抜けており、フィールド探訪のルートを網羅しているわけではない。ただし、第1部の目的は、学問分野の特性がもたらす「まなざし（ものの見方）の多様性」と「対象（見るもの）」の多様性」の一端を理解することである。たとえ同じ地域であっても、学問のまなざしと対象の多様性がある以上、見える風景（知のランドスケープ）も違ってくる可能性がある。それだけ、現実のフィールドは豊かなのであるが、知のランドスケープの多様性を理解し承認しながら、学際的協働の必要性への気づきや、わずかでも自ら知的越境を試みることについてメッセージが届けば、テキストとしての役割は果たせると考えている。そしてその意味で、学際的な環境学のテキストは、学生のためだけにあるのではない。

こうした狙いから、編者は執筆者がそれぞれの講義の参考文献として提示し、自分が執筆した章以外にもできるだけ関連する章について言及してほしいと呼びかけている。オムニバス型の特定科目の共通テキストとは異なる文系環境学の包括的なテキストの構成と活用方法について、組織的に模索していくことも重要であって、それも「人間環境叢書1」の含意であると考えている。

本書の第2部は、人間環境学部の10年に及ぶフィールド教育の経験をまとめたものである。学部開設以来の科目である「フィールドスタディ」は、国内が3泊4日、国外が1週間から2週間程度で、毎年、15コース前後を企画してきた。第2部では、「フィールドスタディ」について、2つの切り口から取り上げている。まず、これまで訪れてきた地域を紹介し、大学生向け環境教育あるいはESD（持続可能な発展のための教育）のフィールドとしてきた背景説明を行っている。またテキストとしてこれから訪れる学生に予備知識を与える意味もある。そして、もう1つの切り口として、次の企画への手がかりを得るために、これまでに実施したコースの経験も回顧している。テキストとしては、学生にこの科目の意図を理解してもらおう狙いもある。

第2部では、こうした「フィールド体験」型の科目でも地域に対する貢献と学生に対する教育効果があることを確認しながら、「フィールドワーク」型といえるゼミナール単位での地域への継続的コミットメントの経験も取り上げている。カリキュラム構造としては、全学生を対象とした「フィールドスタディ」は現地に赴く環境教育・ESDの導入編であり、ゼミナールはより本格的なフィールド教育を可能にする場であると、関係性を説明することができるだろう。こうした関係性についての知見も含め、本書は、学部がFD（ファカルティ・ディベロップメント）の一環として組織的に経験を共有しながら、同時に学生にメッセージを送るというテキストの内的効用はもちろんのこと、10年間の文系環境学部の営みを社会に発信する対外的な役割も自覚して企画された。

ところで、本書の編集段階で東日本大震災が発生したが、本編では「持続可能な地域社会をめざして」という副題とは真逆の事態について新たな章を加えることはできなかった。そこで、「はじめに」と「おわりに」で、本書の内容と持続可能性の危機に直面している東北や日本社会全体の問題との接点について言及し、いくつかの知的課題、実践課題を提示した。本書が出版された2012年4月以降の約1年間の間に、そこで述べた論点についてまとめた書籍もすでにいくつか出ており、結果的に頭出しとして意味があったと考えている。

本書では紹介されていないが、人間環境学部では、その後「フィールドスタディ」で石巻市のコースを加えたり、科学技術社会論、災害政策論、エネルギー政策論などの新しい科目を開講している。これも持続可能性を基本理念として人間-環境の相互作用を考える文系学部の社会に対する応答責任であって、いずれ学部教育の経験をまとめた新たな書籍を世に問うならば、確実に3.11と

それ以降の日本社会について言及することになるだろう。

学部のカリキュラム・ポリシーについて、编者自身が本書を通して認識した「フィールドから考える」ための今後の課題を付け加えるならば、「フィールドスタディ」、ゼミナール、あるいは新たな科目を連関させ、トランスディシプリナリで、かつ問題解決に向けて社会に開きながら広範な参加者が知識生産に取り組む「モード2」(マイケル・ギボンズ)の文系環境学へと、大学教育を進化させていくことである。もしそれが可能であれば、成果は、より洗練された第2世代のテキスト、あるいは第3世代のテキストに反映できるだろう。